

まちづくりセンター
主催によるねりまち
コレカラ集会で出された
提案等


はじめに（「ねりまちコレカラ集会」とは）

練馬まちづくりセンターは、「練馬区都市計画マスタープラン（全体構想：平成 13 年 3 月 地域別指針：平成 15 年 6 月）」策定および練馬区まちづくり条例（平成 17 年 12 月練馬区条例第 95 号）施行の流れを受けて、平成 18 年 4 月に開設された機関です。

練馬まちづくりセンターは、これまでも様々な視点から住民主体のまちづくりを応援してきましたが、開設から 10 年が経とうとしています。そのため、「練馬区都市計画マスタープラン」の改定にあわせて、社会経済情勢の変化や区民の方々が実践するまちづくり活動の活発化なども踏まえ、改めてこれまでの練馬区における住民主体のまちづくりの経過を整理することにしました。そこで、これからの練馬にふさわしい住民主体のまちづくりの方向性について見つめ直す契機として、「ねりまちコレカラ集会」を開催しました。

「ねりまちコレカラ集会」では、まちの身近な課題をとらえた**住民の自発的・主体的な活動**（まちづくりのタネ）を探り出しました。そして、その一歩先の姿をまちづくり活動者と一緒に考えることによって、これから 10 年間の練馬における**住民主体のまちづくりの方向性**（住民主体のまちづくりのコツ）を明らかにするよう努めました。

その際、参加者と一緒に議論したテーマは、主に以下の 4 点です。

<p>練馬に暮らしているからこそ見えてくるつながり方があるのでは？</p> <p>→地域の連携・つながり →若者が練馬で暮らし続けられるようにする →地域とつながりながら働く</p> 	<p>もっとまちの魅力を上手にとらえて、発信していくことが必要では？</p> <p>→まちの魅力づくり →まちのプロデューサー・コーディネーター</p> 
<p>もっと公共施設を有効に使えないか？</p> <p>→公共空間の協働管理 →道路空間の有効活用 →小学校の空き教室の活用 →バリアフリー・ノーマライゼーション</p> 	<p>多様な人やテーマにとっての居場所とは？</p> <p>→居場所づくり →空き家・空き部屋・空き店舗の活用</p> 

4 点とも、自らが住み続けたいと思えるような快適な生活環境と豊かな地域社会を実現するために、住民自身としてどのようにすべきかというまさに“住民目線”に立ったテーマです。

つまり、これらのテーマに沿ってとりまとめた次ページ以降の「住民主体のまちづくりのコツ」は、これから 10 年間の練馬における**住民主体のまちづくり＝区民自らが主役となって出来そうなまちづくり**について、区民の方々と一緒に考え・共有した結果が反映されたものと言えます。

ぜひ、「住民主体のまちづくりのコツ」を読んでいただいた区民の皆さまが、自ら主体となって練馬のまちをさらに暮らしやすくしていくための一歩を踏み出していただけると願っています。

【「ねりまちコレカラ集会」の開催経過】

ねりまちコレカラ集会（その1）

日時：平成 25 年 3 月 20 日 会場：武蔵大学 1 号館

練馬区におけるこれまでのまちづくり活動を振り返った「まちづくり年表」などを示し、皆さんにこれから 10 年間の練馬におけるまちづくりを考える上でおさえておくべき社会的課題などを出していただきました。それをもとに「住民主体のまちづくりを考える上でのキーワード（視点）」について話し合い、共有しました。



まちづくり縁日：
まちづくりマインドマップをつくる



まちづくり白熱教室：
これからのまちづくりの重点テーマを考えよう



まちづくり講座・まちづくりカフェ

「住民主体のまちづくりを考える上でのキーワード（視点）」を掘り下げるために、まちづくりに関する情報や学習の機会の提供を目的とした「まちづくり講座」やまちづくり活動者や一般参加者と一緒に語り合う場「まちづくりカフェ」を開催しました。

＜まちづくりカフェのタイトル＞

第1回：まちの風土と暮らしを心地よくつなぐ『いち』～風土と暮らしをつなぐ「いち」で まちの魅力をプロデュースする

第2回：子育てサロンで地域デビュー～子育ての現場から、ねりまにふさわしいまち暮らしを考える

第3回：図書館、まちづくりの大活用！～「図書館」「児童館」を大変身！ まちの公共施設をまちづくり的に使いこなす

第4回：町会座談会～心地よく安心して暮らせる地域づくりを語りあう～町会って、どんなことをしているの？ 人とまちの魅力をつくりだす地縁活動

第5回：活動拠点を開くってどういうこと？～暮らしとまちがつながる まちにかかれた交流の場所をつくる



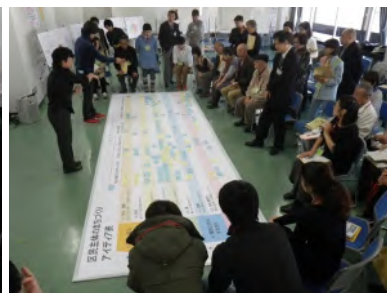
ねりまちコレカラ集会（その2）

日時：平成 25 年 11 月 会場：練馬区石神井庁舎

皆さんに「練馬区都市計画マスタープラン（中間のまとめ）」や「まちづくりカフェの成果」を確認しながら、「10年で自分たちが主役になってできそうなまちづくりアイデア」を提案していただきました。それをもとに「これから10年で住民主体のまちづくりを進めていく上でのコツ」について話し合い、共有しました。



まちづくりワークショップ：
住民主体のまちづくりアイデアを考えよう



話し合い：
住民主体のまちづくりについてみんなで深めよう



ねりまちコレカラ集会（その3）

日時：平成 26 年 3 月 会場：武蔵大学 1 号館

「その2」で導き出された「まちづくりのツボ」をたたき台に、他地区（谷中界隈）における住民主体のまちづくり実践例を話題提供していただきました。その上で、皆さんとまちづくり活動助成事業審査委員が一緒になって、どうすれば実現できるのかという視点から「まちづくりのコツ」をさらに掘り下げ、共有しました。



話題提供：
谷中界隈における住民主体のまちづくり実践例



話し合い：
それぞれのまちづくりの思いをどのようにして実現する？

■住民主体のまちづくりのコツ

1. ねりまにふさわしい『まち暮らし』を考えよう

地域とのつながりを大切にしていこう…

暮らしの中から見えてくる人の輪

- ・ 区民のみなさんが主体となって活動を広げていくときに、まちづくりのことをどのようにして近所の方々に理解してもらおうか、一緒に活動する環境をつくれるかということは大きな課題になってきます。その課題を乗り越えていくためには、暮らしながら、生活しているからこそ見えてきそうな「まちに暮らす人たちの輪」に着目していくとよさそうです。

地縁組織の活動に参加する

- ・ 「まちに暮らす人たちの輪」のひとつとして、町会・自治会などの地縁組織が挙げられます。震災などのいざという時には、地縁組織が大きな役割を果たすはずですが、そのために普段から町会活動に参加できるような工夫をしながら、顔の見える関係をつくっておくことも大切です。例えば、防災訓練やまちの美化などの地域活動、あるいは「町内の庭めぐり」といったようなことを地縁組織とまちづくり活動団体が同調しながら進めることで、家に閉じこもりがちな高齢者や小・中学生とまちの人との交流へとつなげていくなど、子ども・高齢者を取り巻く社会的問題への解決の糸口にできるかもしれません。

地縁組織とまちづくり活動団体がコラボレーションする

- ・ 最近のまちづくり活動は様々な団体がつながることで活性化しています。ただし、町会・自治会とのつながりはあまり活発ではない地域も多々見受けられます。そこでこれからは、NPOなどの団体が町会と地元をつなぐ地域コーディネーター的な役割を担うことによって、停滞気味の活動を活性化させることも考えられます。例えば、従来型の地縁的なつながりに、水・みどり・歴史といったテーマに軸性を置いた新たなまちのつながりを加えていくことも考えられます。

マンション同士で連携

- ・ また、集合住宅が年々増加していく中で、集合住宅に住まう人たちが既存の地縁組織と顔の見える関係をつくりにくいという声もよく聞かれます。例えば、「マンション隣組」といったように、地域のマンション同士で防災活動などに取り組んでいくことで、地域全体とつながっていくきっかけになるかもしれません。



◆ 練馬レスキュー隊と消防署・警察署との合同防災訓練（桜台親和町会）



◆ 「景観まちなみ協定」の取り組み：各家庭の菜の花を見て回るお花見会（大泉北泉町会）

個と地域の連携によってまちの環境を守る・管理する…

個人の財産をまちの財産として守り育てる

- ・ また、個人の財産を「まちの財産として守り育てる」という考え方を持つことで、新たな「まちに暮らす人たちの輪」がつかれそうです。例えば、生垣や庭先などを個と地域を結びつける境界空間としてとらえ、これらを「見せるみどり」「使えるみどり」としていくことで、まちの財産として共有化されます。これからは高齢世帯がますます増えていきます。家や庭などの個人の財産を高齢所有者の手だけで維持・管理することが大変になってくると、いっそのこと、庭のみどりをなくしてしまうということになりかねません。そうならないようにするためには、個人が所有する家・庭の管理をまちの人が応援するしくみを考える必要があります。例えば、「ガーデンヘルプ」として、高齢者や要介護者の方のお庭にまちの人が入り、その方と日常的な会話を楽しみながら手入れをすれば、庭の維持管理もできるし、ひきこもり防止にもなるし、まちの景観も保持されます。さらに剪定した木や実を活用したワークショップ（クラフト・料理・アロマコスメなど）を行い、活動の資金を得ることができれば、みどりの街並みはお宝となります。

ひとり一人の取り組みをまちぐるみへ

- ・ 「個と地域の連携」のもうひとつの考え方として、「雨水浸透枘の設置」や「窓あかり運動」などのように、一人ひとりができることをまちぐるみでPRしていくことによって、地域の課題解決につなげていくことも考えられそうです。



◆オープンガーデンでのワークショップ（NPO 法人自然工房めばえ）



◆民家のコブシを保全するための「挿し木勉強会」（チームみどりの輪）

若者や子育て世代がまちなかで活躍する、 地域に根ざしたサービスをビジネスにつなげる…

若者が地域と関わり続ける

- ・ これからのまちづくりの担い手として期待される若者の視点に立てば、「コミュニティの中で働く」ということが考えられます。江古田には3つの大学があり、自らが大学で勉強してきたことの延長としてまちに残りたい、あるいは、卒業後に社会経験を経てまちに戻ってきて働きたいと願う若者も少なくありません。このような若者が、自分たちの力を発揮し続けながらまちに残ろうとする取り組みをみんなで支えていくことが大切です。

地域課題の解決を仕事にする

- ・ さらに、若者に限らず、子育てが少し落ち着いた母親、生活はできるが自分のために働きたいという人が活躍できる場がまちの中につくられれば、「まち暮らし」は一層豊かなものになります。すでに、練馬には、「まち暮らし」からまちづくり活動へとうまくつながっていった人たちもいま

す。特に、地域に根ざしたサービス：健康・いやし・豊かな暮らし＝「いきいき産業」はコミュニティビジネスにつながるチャンスがありそうです。そのためにも、まずは、「地域に残りたい」「地域で働きたい」と願っている人たちの思いをつなぎとめ、まちづくり活動をスタートさせるための後押しになるようなことをみんなで一緒に考える必要があります。

まずは「ホビネス」ぐらいの気持ちから

- ・ 地域で働くために、いきなりコミュニティビジネスを始めるとなるとハードルが高くなります。まずは、趣味とビジネスの間ぐらいの「ホビネス」ぐらいの心構えでまちづくり活動を始め、活動を通して人とつながっていったり、地域の課題を掘り下げていったりするとよいかもしれません。



◆大学生による小学校での子ども向けワークショップ（旭丘アートプロジェクト実行委員会）



◆児童館を活用した放課後の居場所づくり（アーティスト・イン・児童館）

ねりまちコレカラ集会で出された「住民主体のまちづくりアイデア」

『地域とのつながりを大切にしていく』

- 1) 町会活動を通じた顔の見える関係づくり
 - ・ 防災・炊出しキャンプ（防災飯ごう炊飯）を町会ごとに年1回開催する。
 - ・ 町内会の庭めぐり
 - ・ 庭に食べられる実のなる木を植えて、おすそわけパーティを開催する。
 - ・ 町会活動単位を〇〇丁目より小さい〇〇番地ごとにとすると活性化するかも。
 - ・ 新旧住民が交流する場づくりのために、デジタルとしてホームページをつくり、アナログとして交流会を開催する。
- 2) 子ども達とともにやるまちづくり
 - ・ まちの美化・地域活動
 - ・ 家に閉じこもりがちな高齢者とまちの人、小・中学生との交流
- 3) マンション隣組
 - ・ 地区のマンション同士で防災勉強会・訓練。（例：エレベーターがとまったら… 水がとまったら… ドアが開かなくなったら…など）
- 4) 地縁組織とまちづくり活動団体とのコラボレーション
 - ・ NPOなどの団体が町会と地元をつなぐ地域コーディネーター的な役割を担うことによって、停滞気味の活町会・自治会動を活発化させる。
 - ・ 従来型の地縁組織だけでなく、これからは、古道や水、河川、みどりといった部分に軸性を置いた新しいまちのつながりをつくっていくことができないか。
 - ・ 町会への加入に関わらず、ひとりのまちの人として地域のお祭りなどに参加できるようになるとよい。
 - ・ 町会活動や学校とのつながりをつくるための仲介役、きっかけを覚えてもらえるとありがたい。

『個と地域の連携によってまちの環境を守る・管理する』

1) みどりの街並みづくり

- ・生垣、ガーデニング、みどりのカーテンなど、見えるみどりを創出する。
- ・使えるみどり資源を増やす。
植物活用のワークショップ（クラフト・料理・アロマコスメなど）を行えば、みどりの街並みはお宝となる。
- ・地域ごとにテーマカラーを決めてその色の花等をプランターに植えて統一した町の景観をつくり出す。

2) ガーデンヘルプ

- ・お屋敷の庭の維持管理を、まちの人が応援するしくみをつくり、65歳以上の在宅の方のお庭に入り、その方の質感を落とさない庭の手入れをしながら景観も保持する。
- ・木が大きくなり過ぎたお宅のお手入れを援助するための資金調達として、作った小物を売って一部を援助する。

3) 雨水の活用「雨水浸透枡」の促進

- ・雨水浸透枡を設置しただけでは湧き水は増えないが、防災に役立てることができる。
- ・小金井市の成功事例をみると、父ちゃん・母ちゃん・水道屋さん・行政…みんなが協力して儲かるしくみになっている。
- ・家庭での雨水の貯留・浸透、降雨時の水利用の制限によって、水害に強いまちにする。

4) 安全・安心のまちづくり

- ・仕事帰りの女性も安心！道路側のライトを12時まで消さない「窓あかり運動」を実施する。
- ・夜のまちにたむろするワルたちをパトロール隊として雇用する。

『若者や子育て世代がまちなかで活躍する、地域に根ざしたサービスをビジネスにつなげる…』

1) 若者が活躍できるまちづくり

- ・学生がまちと関わるために、イベントだけではなく、パーマネントとして生活できるように支援するための仕組みがあるとよい。
- ・いきなりコミュニティビジネスを始めるのではなく、まずは、趣味とビジネスの間ぐらいの「ホビネス」ぐらいの心構えで、人と人をつないでいったり、お得意さんをつくっていくとよいのでは。

『その他のまちづくりアイデア』

[まち暮らし] × [安全・安心]

- ・防犯灯を青色街灯にする。
- ・「ポーサイ、ポーサイ！」と走りすぎると真の目的を見失うおそれあり。

[まち暮らし] × [にぎわい]

- ・放置自転車を使って改造車をつくれる工場があるといいな。

[まち暮らし] × [環境共生]

- ・横浜市の緑の協会が実施しているように、植樹カウントをしてCO₂を減らす。

[まち暮らし] × [住環境・交流]

- ・町会とは別に、うちのまちのことはまちのみんなが決めるしくみをつくる。
- ・練馬と地方をつなぐ知恵の交換（みどりも自然も）
- ・もっと活きた動きのある内容をひとまとめに見られるように、まちづくり活動に参加したい人、参加してもらいたい団体などのためのポータルサイトをつくる。

2. まちの魅力を『プロデュース（演出）』しよう

練馬の資源・文化を見つめ直し、まちづくりに活かす…

まちの魅力を見つめ直して発信

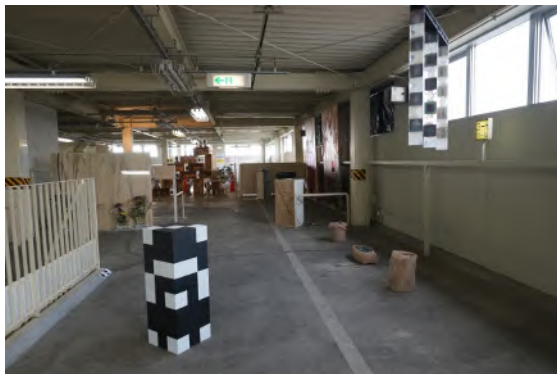
- ・ まちづくり活動を活発化させていくためには、「まちの色（魅力）」をうまくとらえること。そして、多様な人材を巻き込みながら「まちの色」を発信していくことが大切です。

江古田×アート

- ・ 例えば、「江古田とアートをかけ合わせる」。ギャラリー、ミニシアター、美術館、スタジオなど、江古田に点在する店舗・拠点、そして江古田に暮らす人たちが文化・芸術を通してつながり、「まちの色」として発信されていけば、新たなまちのにぎわいがつくり出されていきそうです。

コブシ、アニメ、歴史

- ・ 例えば、「コブシを活用した商品を開発する」。練馬区の木であるコブシをより多くの区民に知ってもらえるような活用方法を考えることで、様々な人たちの協力が得られるかもしれません。その他にも、「アニメ」などの地場産業を「まちの色」としてとらえてまちづくりに活かしていくことも考えられますし、あるいは、まちに残る古くても面影のあるお店や広くなくても散策しなくなる古道などを「まちの歴史資源」を磨き上げていくということも考えられます。



◆まちを舞台にしたアートイベントの開催(江古田ユニバース)



◆まちの歴史を再発見できる高札の設置(北町旧跡研究会)

まちなかの農地に着目する…

農地の多面的機能をまちづくりへ

- ・ 『練馬のよさは、のんびり落ち着けること。』という言葉を目にします。のんびりできる要因のひとつとして、23区内でもっとも農地が多いということが挙げられるのではないのでしょうか？
農地が持つ機能としては、農作物の供給機能に加えて、防災機能や環境保全機能、景観形成機能、健康増進機能、教育（食育）機能などがあります。これらの農地が持つ多面的な機能を活用したまちづくりというものが考えられそうです。

農地を介した顔の見える関係づくり

- ・ 例えば、ご近所にごひいきの農家をつくるなど日常的に農家との係わりを密にしながら、手伝い・コミュニティの場として農地を地域住民とともに守り育てていく。そうして、練馬の特色である農地を中心とした普段からの顔の見える関係をつくっていけば、いざという時には防災拠点になるなど安全安心のまちづくりにもつなげていくことができそうです。

農地を練馬の風景として守り育てる。

- ・ 練馬における農地の価値がますます高まっていく一方で、近年、農地は、相続（税）の関係で年々

宅地化され、減少しているのが現状です。農地を残していくためには、農家だけでなく、行政や区民のみなさんが共通理解を持つこと、新たに農に取り組む人材（担い手）を育成していくことが必要です。例えば、「農の風景育成地区」制度などの活用を地域のみなさんと一緒になって考えていくことも考えられます。



◆農家の思いを聞く「ぶどう園めぐり」（ラララ MaMa）



◆実験農地での生ごみ堆肥化実験（ねりま・ごみフォーラム）

まちのプロデューサー・コーディネーターが活躍する…

人と空間、人と活動をつなげる役割

- ・それぞれのまちづくり活動をさらに連携・発展させていくための存在として、まちのプロデューサー・コーディネーターのような役割を果たす人材が重要になってきそうです。まちのプロデューサー・コーディネーターがいれば、地域活動している人たちに加えて、例えば、商店街と公園といったように、一見直接関係しないような人や空間をつなげていくこともできるからです。

基本は地域単位でのさまざまなまちづくり

- ・一方で、せっかくまちのプロデューサーがいてもまちづくり活動の担い手がいなければ、その力を発揮することはできません。つまり、地域単位で日常的に様々なテーマのまちづくり活動が行われていて、人と人あるいは人と活動をつなげるネットワークがベースにあってこそプロデューサーの役割も発揮できるということになります。

積極的に他の活動とつながる

- ・まちのプロデューサー的役割を果たすまちづくりの担い手を支援できるようなしくみをつくることとともに、まちづくり活動をされているみなさんも積極的に他の活動とつながり、お互いにエンパワーメントしながらコラボレーションしていく中でまちづくりの輪が広がっていくのではないのでしょうか。



◆地域のお店やクラフト作家などが出展する「井のいち」の開催（「井」企画室）

ねりまちコレカラ集会で出された「住民主体のまちづくりアイデア」

『練馬の資源・文化を見つめ直し、まちづくりに活かす』

- 1) まちの魅力を再発見する
 - ・路地の“ステキさ”を掘り起こす。
 - ・歴史資産・観光・景観として、古代からの道を残そう。
 - ・子ども達が練馬の昔・人・文化に愛着を持って育つように、練馬カルタ「井のカルタ」をつくる。
 - ・「土蔵」や「納屋」など、歴史的な建物を守りながら、環境教育・アート・芸術の拠点として活用していく。
 - ・古くても雰囲気の良いお店にちょっと手を加えてつなげればいいものになるし、発信もできる。
 - ・コブシを活用して商品化することで、コブシが練馬区の木であることを知ってもらう。そのために、コブシを通して様々な活動をコーディネートする。
 - ・コブシカフェをつくる。コブシ酒を練り込んだマドレーヌなど関係のある食品をおき、周りにコブシの木を植え、花見などをする。
- 2) 江古田×アート
 - ・ギャラリー、ミニシアター、美術館、スタジオなど、点在する店舗・拠点が文化・芸術を通してつながり、まちのにぎわいつくりを創出する。
 - ・江古田の下北沢化
- 3) アニメでにぎわいつくり
 - ・行政がアニメによるまちの活性化を掲げているので、レトロで上質なアニメ作品を見せるミニシアターやスタジオをつくる。
 - ・行政が箱をつくるだけでなく、アニメに関するまちづくり団体を支援したり、コミュニティづくりを進める。
 - ・水木しげるロードのようなキャラクターを用いた地域活性化。
 - ・999号を成層圏に飛ばすプロジェクト 最終的には有人飛行を目指す。
- 4) まちなか観光を進める
 - ・練馬のまちの魅力をみんなでグルグル周ったりできる、練馬まちなか博物館（エコミュージアム）。
 - ・その町の特徴を活かしたオリジナルグッズの作成。
 - ・アーティスト・商店街の人・子どもが一緒になってまちのフラッグ作りや壁画制作（落書きの壁、シャッター）をする。
 - ・商店街でまち住民による綱引き！
 - ・景観をテーマにした地域の関係づくりとして、景観手形を発行し、手形を集めると歩いた後は銭湯へ行けるようにする。
 - ・自転車のできる観光に力を入れる。
 - ・安心して歩ける道のネットワークをつなぐ。まずは地図づくりから。
 - ・ねりまポータルサイトをつくって、そこを見ればねりまのイベントがすべて分かるようにする！

『まちにある農地に着目する』

- 1) 農地の防災拠点としての活用
- 2) 農近生活（畑の周りの空き地等を活用して、農家と住民をつなぐ、農地・農家・アパートなどのちょっとした空き地を使ってご近所の方が緑を楽しむ。）のすすめ
 - ・農地と関係性の深いまちづくり活動を応援していく。
 - ・近隣住民と一緒に花を管理
 - ・野菜の売買
 - ・近所にMY農家をつくろう！
 - ・地域住民と農家の定期的交流会の実施
 - ・農を活かしたコミュニティ・ハウスをつくって、畑と隣り合わせでワークショップを行

う。援農・後継対策にもつながる。

- 農地を残すために、農家だけでなく、新たに農に取り組む人材（担い手）を育成していくための仕組みをつくる。
- 農もカフェも原点は人・自然であり、農家の知恵を引き継いでいくことが大切である。自然や先人の知恵を学んで、ぜひ生き抜く力を持ってほしい。

3) 「農」からのリサイクル

- 農家とレストランとねりま・ごみフォーラムの循環をつくる。
農家→（野菜）→レストラン→（生ごみ）→ねりま・ごみフォーラム→（有機肥料）→農家

4) 「農の風景」の保全

- 「農の風景育成地区」制度などを活用する。

『まちのプロデューサー・コーディネーターが活躍する』

1) まちと人をつなげる人材の育成

- 地域を動かす力は、プロデューサー・コーディネーターがいること、まちおこしのベースにプラットフォームがあること。
- 地域をコーディネートする人材を育成していくための支援体制（制度）を整える。
- コーディネーター、プレイヤー、指示する人、それぞれが役割を意識しながら活動することが大切。
- 外部コーディネーターが必ずしも必要ということではなく、まちづくり活動のプレイヤー自らが自分たちでコーディネーションできることもある。
- インキュベーション・起業支援施設の整備。

3. 『公共的な空間』をまちづくり的に使いこなそう

公共的な空間をまちづくりの拠点にすえる…

小学校・中学校を拠点にすえる

- ・ 地区あるいは地域単位のまちづくりを進めていく上で、その中心となる公共施設を拠点にしなが

ら取り組んでいくということが考えられます。
例えば、「小学校・中学校」。これからさらに少子高齢化が進んでいくと、小学校・中学校がこれまで以上に開放され、機能の複合化が進んでいくということも考えられます。これから小学校の空き教室が増えてくることに対して、まちづくり・地域づくりの担い手がいまから地域の中でうまく活用するようなことを考えておくと地区・地域のまちづくりの拠点になり得るかもしれません。

指定管理制度をきっかけにする

- ・ また、最近では、図書館や公園などの公共施設を「指定管理者制度」に基づいて民間事業者が管理しているケースが多くなっています。これもひとつの協働管理のあり方としてとらえ、指定管理者と区民のみなさんがつながっていくきっかけとしていくことが考えられそうです。



◆芝生の校庭を活用した防災キャンプ(中村小グリーンキーパーズ)



◆まちなかの公園での高齢者のつながりづくり(ガラクタ公園で体操する会)

今ある公共空間の使い方を工夫する…

道路の使い方にも目を向ける

- ・ これからの自分たちの生活を豊かにしていくために、これまでに整備された公共空間をどのように有効活用していくべきかを考えることができるような時代になり、国の制度も整ってきています。

例えば「道路」。まちの維持管理コストを考えると、これからは道路の「整備」だけでなく「使い方」にも目を向けていかなければいけないのではないのでしょうか？例えば、「自転車をもっと走りやすいような道路にする」「昔のように子どもが遊べるようにする」「シェアド・スペース化して、車と人と自転車が共存する道路空間をつくる」といったようなことが考えられます。

バリアフリーのまちづくりを住民の工夫で

- ・ また、公共空間の使い方を考えていく上で、「バリアフリーのまちづくり」は、これからも引き続き進めていかなければならない大切なテーマです。「空間的なバリアフリー」を実現するためにはお金と時間がかかることも事実ですが、「お金がかかるから進まない」とするのではなく、区民主

体のまちづくりの視点から工夫できることを考え、「なるべくバリアをとっていこう」や「ノーマライゼーションしていこう」という活動を広げていくことも大切です。心理的・身体的バリアを取り除いていく社会をつくるために、地域のつながり・目に見えない心のつながりを大事にしながら、地域に根ざした活動を行なうということです。

公共空間の維持・管理ルールに地域ならではの自主的なルールを加える

- ・ 最近の公共的空間は、管理されすぎの面があり、子どもたちが自由に遊ぶことができる公園や遊び場が少なくなっているという声を耳にします。確かに事件・事故が発生したことを考えるとそうならざるを得ないことも理解できます。その一方で、まちづくり活動を通して公園や児童館などについての地域ならではの使い方を見出している団体もあります。それを地域の人たちと一緒に議論していくことによって自主的な管理ルールへと高めていくことができれば、もっと子どもたちが楽しめる空間ができるようになるかもしれません。



◆まちなかだれもが休憩できるベンチ「ちょイス」の設置（円居の会）



◆手話を交えながら、親子で気軽に交流できる場づくり（手輪るサロン）

ねりまの自然を楽しみながら協働で管理する…

住民・事業者・行政の協働で管理する

- ・ 区民のみなさんが主体となった活動の特徴に「自然などの資源を楽しむ」「人や他の活動とつながる」ことが得意であるということが挙げられます。例えば、「公園で防災キャンプを開催する。」「憩いの森で竹テント・ベンチづくりをワークショップで行い、併せてカフェやフェスティバルを開催する。」といった活動を進めながら、これらの公共的空間を住民・事業者・行政の三者の協働で管理していくしくみをつくっていくということも考えられます。



◆白子川の清掃、水質・生き物調査活動（白子川源流・水辺の会）



◆憩いの森での自然観察会の開催（いんせくとかふえ）

そこにある自然を介して活動がつながる

- ・ さらに、協働管理に向けては、自然や環境をテーマに活動をしている多くの団体・グループが交流ネットワークをつくって、区のみどり施策をバックアップすることも大切です。次世代を担う子どもたちに受け継いでいくために、テーマを共有する団体やグループが連携し、公共空間にある自然（生きもの・植物・川）を守り、活かし、共存できるようにする活動を広げていきましょう。

「ハードのまちづくり」と「ソフトのまちづくり」を組みあわせる…

住民主体のまちづくり活動から公共施設整備へとつなげる

- ・ 公共施設整備などの「ハードのまちづくり」が先行して、その完了を待って「ソフトのまちづくり」を進めようとする、その時点ではすでに利用に際しての規制が多くなってしまっているという場面を多く見受けられます。しかし、住民主体のまちづくりには、「ソフトのまちづくり」を先行させながら、地域のみなさんの思いを集め、計画段階から関係機関と調整していくことにより、それを「ハードのまちづくり」が受け止められるようにするという考えもあります。ソフト先行型のまちづくりを進めていくためにも、まちづくり活動を進めていく過程においては、地域をコーディネートしていくという意識をもってヒト・モノを発掘し、つなぎあわせていきましょう。

ねりまちコレカラ集会で出された「住民主体のまちづくりアイデア」

『公共空間をまちづくりの拠点にすえる』

- 1) みどりと水にふれる環境を小学校などの公共施設の近場に
 - ・ 小学校の周りの農地を優先的に保全する活動を進める。
 - ・ 学校農園の取り組みを広げる。
 - ・ 小学校・中学校・地区区民館などの公共施設の敷地を使って、屋敷林を再生する。
 - ・ 公共施設の外周を食える景観にして子どもに収穫体験。

『今ある公共空間の使い方を工夫する』

- 1) 新たな発想のみちづくり
 - ・ 車の入らない草道をつくろう！袋小路の舗装をはがして草地にすることによって子ども達が遊べる場をつくる。
 - ・ 公園（あるいは避難拠点）へたどり着く道は、みどりがつながっていてほしい。
 - ・ 都市計画道路の計画をなくすためのシステムをつくる。
 - ・ 練馬は都市化が進み、農地の保全がむずかしくなってきた。今こそ道幅を広くした都市計画を立てるべき。
- 2) 自転車のまちづくり
 - ・ 既存交通ネットワークに自転車の活用を取り入れることで、環境（省エネ、LED、リサイクル）にも健康にも効果のあるまちづくりを進める。
 - ・ 歩道を気にせず置いて、カフェやお店に行けるように、商店街の真ん中にママチャリ専用駐車を。
- 3) 公共空間の活用の幅を広げるための新たなルールづくり
 - ・ 公園や児童館などの公共的空間の管理について、先事例を参考にしながら、それを次のステップにつなげていく仕組みをつくっていくことが大切。
 - ・ 練馬区は、みどりの空間は多いにも関わらず、禁止事項だらけで子どもの遊び場がない。本当の意味でのみどりを活かしたまちづくりを進めてほしい。

- 自由にが少なくなっているが、地域の人たちが自主管理ルールをつくれば、子どもたちももっと自由に遊ぶことができる公園や遊び場をつくれる可能性もある。
- 機能性重視になりがちな空間を、もう少し工夫して空間を広い概念で活かせるようにできないか。

『ねりまの自然を楽しみながら協働で管理する』

- 1) 公園や憩いの森を活用しよう
 - 公園での防災キャンプ
 - 憩いの森で竹テント・ベンチづくりを行う。→フェスやカフェを開催。(資源を楽しむ、人がつながる)
- 2) 河川空間を活用しよう(水とみどりにあふれた練馬の原風景を大切にする)
 - 昔、川辺や川であった場所の公共化
 - 河川敷を公共のものに 住民がつくり続ける空間に。(田んぼ、畑、スポーツなど)
 - 各河川に「親水用プール」をつくる。
 - 埋められてしまった小川空間をせめて緑の通りにする。
 - 石神井川で小水力発電！
- 3) いきもののまちづくり
 - 練馬の魅力は、石神井公園や清水山憩いの森などの貴重な動植物が生息している場所があることなので、まちづくりという概念の中に「いきもの」も対象にすべき。
 - 練馬区の緑地・公園がそれぞれ生きものたちにとって安心できる豊かなオアシスになってほしい。将来、豊島園がそのための拠点になってほしい。
 - 湧水池の保護・再生
 - 練馬のヤブを守ろう！
- 4) 区の助成が必要？
 - 「屋敷林」や民家の「生垣」などは手入れが大変なことから年々減少している。みどりの保全・育成を行政として取り組んでほしい。
 - “草地” “原っぱ” に税の優遇を！

『ソフトとハードを組み合わせる』

- 1) ソフトからはじまるまちづくり
 - まちづくりはハードとソフトの組み合わせによって成り立つ。
 - ソフトのまちづくりが先行して、それをハードのまちづくりが受け止めていく流れをつくる。
 - ソフト先行型のまちづくりを進めていくためにも、地域をコーディネートしてヒト・モノを発掘し、つなぎあわせ、形成する役割を担うNPOの存在が大切。

4. まちに開かれた『居場所』をつくろう

外出できる社会・環境づくり…

それぞれの居場所づくり

- ・ 練馬というまちを、子どももお年寄りも障害のある人もお互いに支え合ってやさしく住みやすいまちにしていくためには、それぞれの「居場所をつくる」ということが1つのキーワードになってきています。

高齢者の居場所づくり

- ・ 例えば、「高齢者の居場所づくり」。アクティブシニアと呼ばれる元気な高齢者がどんどん地域で活躍できるような環境をつくっていけば、高齢者の健康維持につながるだけでなく、地域にとっても、さらには社会保障などの国レベルの問題解決にもつながっていきそうです。

乳幼児とママの居場所づくり

- ・ あるいは、「乳幼児とママの居場所づくり」。孤立しがちな若いママが乳幼児と一緒に参加できる講座・イベントなどが定常的に開催される場や子連れOKのママ向けコワーキング広場など、親子と一緒に楽しむ、ふれあえ、後々まで楽しさを共有できる環境をつくっていくことができれば、若い世代の社会参加にもつながっていきそうです。

テーマに関心を持つ人同士の居場所づくり

- ・ 高齢者に限らず、子育て、農やアートといったテーマも考えられますが、大切なことは、いずれも「居場所＝みんなが楽しめる場」をつくるということです。テーマに関心を持つ活動団体やまちの人が集まれば、それぞれのスキルアップや新しいアイデアの発掘にもつながります。

居場所としてのコミュニティカフェ

- ・ 最近、地域に開かれた居場所としてコミュニティカフェを始めたいと願うまちづくり活動団体の声を耳にしますが、一方で思いだけが先行し、経営のノウハウを知らずに開業してしまうケースも見受けられます。コミュニティカフェを始めるに当たっては、団体内で思い(目的)を共有し、必要に応じて専門家のアドバイスを得ながら事業計画を立てておくということも大切です。



◆商店街も協力した“おみせやさんごっこ”あそび(練馬こども劇場)



◆乳幼児とママたちを中心に多様な世代が交流できるひろばづくり(ハッピーひろば)

まちの空きスペース(空き家・空き部屋・空き地など)を活かした居場所づくり…

空きスペースをまちづくり活動の場に

- ・ 少子高齢化に伴って空き家・空き店舗・空き部屋・空き地がどんどん増えつつあります。この空き家などをその一部でも活用することによって働く場や地域交流の場を創出したり、いろんな活動ができそうです。例えば、空き家・空き地をアートセンターや美術活動の拠点にしたり、公共的な利用をする場所として地域活動団体に開放するなど、うまく活用できないでしょうか? そのためにもまずは、多様な主体の方々が一緒になって考える場づくりから始めることが大切です。

借りたい人と貸したい人を仲介する仕組みづくり

- ・ 図書館や公園・憩いの森といった公共空間に加え、空き家・空き地や自宅開放なども含めて、どのようにして居場所をつくったり、みんなでシェアしたりするかといったしくみを考える必要があります。長期的には、「家賃補助」や「固定資産税の減免」といった空き家活用に対する行政のインセンティブ制度が必要になってくるかもしれませんが、まずは、借りたい人と貸したい人を仲介するしくみ、その役割を担う組織づくりについて考えることが大切そうです。空き家を活用して活動団体の拠点を用意してあげるということ自体が NPO やまちづくりセンターのミッションになりえるかもしれません。



◆空き家を活用した交流の場づくり（笑和の家）



◆自宅の一部を開放した交流の場づくり（パペレットカンパニーねりま）

ねりまちコレカラ集会で出された「住民主体のまちづくりアイデア」

『外出できる社会・環境づくり』

- 1) 親子・子ども・親が安心して社会参加できる場づくり
 - ・ 親子が一緒に楽しむ、ふれあえ、後々まで楽しさを共有できる場をつくる。
 - ・ 年齢が違っても競争なく安心して話せるので、子どもだけでなく若いママも世代の違うママとの異年齢交流を促進したい！
 - ・ 若いママが様々な講座やイベントに参加できるよう保育は0歳からOKに！
 - ・ 1口1,000円の募金を募り、4歳になった区民（子ども）が全員お芝居を見られる“Happy4”プレゼントをやりたい！子どもの文化花開け！
 - ・ 子どもが自由につくれるアニメスタジオをつくる。
 - ・ ケンカしたいワルたちを闘わせるダンス・バトルのスタジオをつくる。
 - ・ 腹が減った子ども達用のシェア・キッチンをつくる。
 - ・ すみびらき形式で、子連れOK！ママ向けコワーキング広場をつくる。
- 2) 多世代でだれもが交流できる居場所づくり
 - ・ 多世代交流 障害のあるなし関係なしに交流する居場所をつくる。
 - ・ 「障害を持つ母親の働く場」と「地域住民と交流できる場」の両方を兼ねた場がほしい。（例：練馬の農業を生かしたやさいかフェなど）
 - ・ 認知症カフェ
 - ・ 回想法で区民を元気に！
 - ・ 外国人による講演会と地域住民との交流。
 - ・ 商店街に365日やっている何でも誰でもOKのサードプレイスをつくる。
 - ・ 女性が一人で気軽に入ることが出来、食事等ができる店をつくる。
- 3) 居場所としてのコミュニティカフェ
 - ・ コミュニティカフェが、もう少し地域に開かれた場になればよい。
 - ・ 例えば週末店長を募集するなどの人とのつながりを大切にしながらコミュニティカフェを運営していく。

- コミュニティカフェを始めたい団体はある。そのような団体に相乗りしていきたい人もいるはず。例えば、まち歩きをした後、コミュニティカフェに立ち寄ってコブシで作ったお菓子を食えるといったようなことが考えられる。
- 居場所づくりとしてのカフェを継続していくためには経営コンサルタント的な視点が必要。
- 家びらきやコミュニティカフェの可能性を大学のゼミでできないだろうか？
- コミュニティカフェは、イベントだけではなく建造物の活用と一体となって取り組んでいくことが望ましいが、多くは経営のノウハウを知らずに開業してしまうケースも多く、専門家のサポートが必要である。大学には専門家がいっぱいいる。

『空き家を活かした居場所づくり』

1) 空き家の活用

- 働く場・地域交流の場の創出…場所があればいろんな活動ができる。
- オリンピックに向けて空き家を外国人向けのホテルにする。
- 空き家の持ち主とのやりとりが難しい。中間支援組織・NPOなどの協力が必要

2) 区の助成が必要？

- 家賃を行政が支援してほしい。
- 1階を介護ハウス、2階を自分の家にする整備に区の助成を。
- 今後、人口が減少して住宅が空いてくるので、住みかえのしくみを！

『その他のまちづくりアイデア』

[居場所] × [住環境・交流]

- 他の団体とコラボしてスキルの向上、新しいアイデア発掘！

おわりに(「ねりまちコレカラ集会」と都市計画マスタープラン)

「ねりまちコレカラ集会」では、これからの10年間の練馬における住民主体のまちづくりの方向性を明らかにするように努めました。

「ねりまにふさわしい『まち暮らし』」、「まちの魅力を『プロデュース』」といった内容と、都市計画マスタープランは、接点が少ないように見えます。

しかし、都市計画マスタープランは、区をはじめとする行政が進める都市計画についての基本的な方針であるとともに、住民等が主体となって行うまちづくりの指針という両方の性格を併せもっています。

今回の「ねりまちコレカラ集会」で出されたキーワード(視点)を、どのように練馬区のまちづくりに活かしていくかが、今後の課題ではないでしょうか。